

## 第16回「東書教育賞」の審査を終えて

東書教育賞審査委員会

〔A部門〕

第16回「東書教育賞」を受賞された先生方に、心からお祝いを申し上げます。

この「東書教育賞」は、東京書籍の創業75周年を記念して創設されたもので、昭和60年1月に第1回の募集要項が発表されました。その後、この賞についての先生方の関心も年ごとに高まりまして、今回のA部門「教科指導や学校経営に関する実践部門」には、小学校114編、中学校63編、合計177編という多数の論文が応募されております。

今回の課題は「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。これは小学校、中学校におきまして非常に大切な課題でございまして、私どもは、創意工夫を加えた実践が具体的に記述された論文が集まることを期待したわけでございます。審査の基準としましては、次の三つがあげられます。

- (1) 実践の結果に基づいて子どもの姿が具体的に記述され、論じられているか(実践性)。
  - (2) 実践のなかにどのような創意工夫がみられるか(創意性)。
  - (3) 特殊な実践ではなく、だれにでも応用できるような一般化への手掛かりがあるか。
- また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分になされているか(一般性)。

その他、論文としての体裁が整っているか、応募規定に従っているかなどの点を、慎重に審査させていただきました。今回の応募論文では、新しい学力観に立った指導が、すべての教科にわたってさらに工夫され、強力に進められていることが読み取れました。また、新しい教育課程の内容を先取りする形での実践報告が数多くありました。とくに「総合的な学習」に関する実践が著しく増え、39編と、応募論文の2割にあたっております。このよ

うに実践の課題が多岐にわたってきていますことは、注目するべきことだと言えます。

論文を拝読いたしまして、先生方の日常の学習指導に対するご熱心さと情熱に打たれ、いかにご苦労が多いかがわかると同時に、優劣のつけ難い力作を審査することの難しさを痛感いたしました。

それらの中から審査の結果、A部門小学校の部で最優秀賞1編、優秀賞2編、特別賞1編、奨励賞4編の計8編を、中学校の部では、最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞3編の計6編を選出いたしました。

中学校の部の最優秀賞は、愛知県碧南市立中央中学校の岩井伸江先生ほかの「共に生きる心を育む総合学習 福祉マップづくりを通して」が選ばれました。

この「福祉マップ」というのは、地域の街中を調べ歩いて、障害者の利用に配慮した施設その他を地図化したものです。本実践の最大の特色は、マップづくりそのものが目標になってしまわないよう、福祉教育としての計画と実践とが着実にこなわれていることにあります。

仮説による行動的検証、地域に密着したマップづくり、障害者の疑似体験、福祉施設の訪問、インタビュー等々を積み重ねていって、障害者の方も交えたマップの検証の全体集会をし、しかもマップを地域に配付して、あちこちに掲示してもらい、実際に効果をあげるなど、地域の協力と信頼とを得ています。「共に生きる」という願いを子どもたちが自らのものとしていく、その意識の変容がわかります。創意、計画性、一般化、そして総合的学習の実効を示した点で、模範となる優れた実践であります。

つぎに優秀賞でございますが、一つは広島

県大竹市立小方中学校の若木常佳先生の「司会力を育成するための取り組み 3年間を見通した指導計画から」です。

この実践は、コミュニケーション能力である司会力を「即時応答力」としてとらえ、その習得を目標にした3年間にわたる実践です。他とかかわり合う発言能力を育成するために、まず話し合いの技能の習得をへて、交通整理としての司会の役割りと方向性を明確にしています。手だての構造化や実態把握の項目の評価など、綿密な論理と段取りで、狙いを達成する道筋がしっかりとした印象を受けました。

優秀賞の二つめは、静岡県富士宮市立大富士中学校の中野聡先生の「英単語学習のためのストラテジーの活性化のための実践」です。

これは、英単語学習の機会を、身の回りの広告や看板、レッテルなど、生活のなかで見つけてこさせ、楽しい学習雰囲気、興味と効果をあげている実践です。指導体系も、辞書引き、言い換え表現、絵カードや自分の意味地図など、じつに多彩です。これらの個々の生徒に合った方法をとおして、各自に適した学習のストラテジーがあることを意識させることによって、単語を覚えながら、その学習方法をも身につけていくという成果をあげられております。教師と生徒が協同して作り上げた学習の記録ともいうべきもので、貴重なものと思います。

いずれの論文を拝見いたしましても、現場の先生方ひとりひとりが、今の子どもたちに、しっかりした基礎、基本の学力を身につけさせることにいかにご苦心なさっているか、実践がどれほどご苦労であるかということが痛感させられます。また、それに加えて、先生方が現実に子どもたちを前にして、いろいろと創意工夫をしてくださっているということです。このことがどの論文にも、はっきりと読み取ることができまして、一つの大きな成果ではないかと感じた次第でございます。

概要は以上でございますが、申すまでもなく教育課程の基準も改正され、新しい学習指導要領のもとに、どの学校にも特色のある教育の実践、特色のある学校づくりということが、大きく期待されているわけでございます。どうか、この東書教育賞の論文に応募された経験を生かして、日頃の実践にあたっていたきたいと思います。

いま、世をあげて教育改革ということが言われ、いろいろな提言や施策が出されているわけでございますが、こういう論文を拝見いたしまして、私がつねに感じますことは、これからの教育実践の第一線になっていただく先生方に、しっかりした考え方を持っていていただきたい、なんでこういうことを子どもたちに今やらせるのか、ということに、自分なりの哲学を持って毎日毎日の学習にあたっていただきたいということです。

戦後教育云々と言われますけれども、これからの教育改革は、戦後云々ではなく、「戦後後」の教育のあり方をつくっていかなくてはならない。これが今度の教育改革のねらいであり、願いでなければならぬと思います。

先生方の一層のご活躍をお願いいたします。

(多湖 輝)

#### 〔B部門〕

第16回東書教育賞B部門に受賞されました先生方、まことにおめでとうございます。すばらしい論文をお寄せいただきまして、ありがとうございました。

今回はすこしB部門の応募論文が減りましたが、いささか残念に思いますが、小学校では国語、社会が減り、総合的学習が増えております。中学校では国語、社会が増えているという傾向でありました。最終審査には小学校6編、中学校6編が残りましたが、小学校では5編が総合的学習で、中学校ではすべてが教科でした。

B部門の審査では、A部門の審査の視点に加えて、コンピュータの特性を生かした実践であるかということ、それからその利用の輪が広がっていくような実践であるかという点を基準にしているわけでございます。

今回、最終審査の対象となった12編のうち11編が、インターネットとかホームページあるいはテレビ会議といったICT（情報通信技術）を活用した実践でありまして、時代を反映しているということを感じました。その背景がありまして、この1年でも文教政策が情報関係で動いております。昨年の4月にG8の教育大臣フォーラムが日本でありましたが、先進国の間で、ICTとか遠隔教育が今後は大事であるということが話され、国策というより世界策となっております。また、九州沖縄サミットでのIT革命、それから国会でできましたIT基本法、こうしたなかでも情報教育とか、情報技術を教育に活用することが重要であるということが含まれています。また、高校では、情報が選択必修になりますので、その指導者の先生の養成ということで、教員養成大学での課程認定が進んでいますし、コンピュータのコーディネーターの研修とか、Webのインターネット教材の開発への援助というような国策もさかんでございます。高速ネットワークに補正予算がつきまして、全国の学校4万校の約1割近くが高速ネットワークでつながっていくことになります。ただいまでは、おそらく6割、今年末ではほとんど全ての学校がインターネットで接続されるでしょう。そういう状況を反映しているものと思いました。

さて、今回、B部門中学校の論文では、優秀賞が2編選ばれております。

ひとつは、愛知県岡崎市立城北中学校の森竜師先生ほかの「主体的に生き生きと学ぶ生徒を育むインターネットの活用」でござい

ます。

この研究では、学校ぐるみの豊かな実践が

書かれていて、優れた論文であります。もう少し焦点化してくだされば最優秀賞に値するという審査員の評価でした。

この実践では、通信型のマルチメディアで、ホームページを作る、検索する、メールを交換するとかチャットやテレビ会議とか、いろいろとマルチメディアを使って、最新の専門的な情報を、直接に情報源からとる。また、非常に広域に向かって自分たちのまとめたものを発表する。そしてほかからのフィードバックをとる。そういう情報をやりとりしたり、自分たちが送ったりすることをおして、その先に人がいるんだよ、コンピュータとやりとりしているのではなくて、ネットワークの先にいる人と情報をやりとりしているのだよということが学習され、子どもたちにわかっていくという趣旨の報告です。ここでとりあげられた教科が、英語と理科、社会科でして、英語の場合ですとホームページを作って、チャットをして、テレビ会議をして、国際理解、日本と外国との間の英語を使ったやりとりで、子どもたちの実践的な英語力が深まっています。理科については、ホームページを作って充実するのですが、太陽系の学習のところですから、天文台の先生とテレビ会議で話したりする。これもやはり、ネットワークの先に人がいるわけです。社会科の場合は、産業廃棄物の学習をするときに、遠くの学校や地域の人が、どういうふうに扱っているのかについて、情報のやりとりをします。やはりネットワークの先に人がいる。人と人との交流をネットワークが助けてくれるのだよ、ということがわかる。先生の役割は、子どもたちが情報の先にいる人と結びついて情報をやりとりすることのナビゲーターなのだ結論づけていらっしゃるという優れた論文でした。

もう一つの優秀賞は、北海道札幌市立伏見中学校の「探究する意欲を育む運動ソフトの活用」です。これは最終審査に残った12編の論文のなかで、たった一つの従来型のコンピ

ユーたソフトを使った貴重な報告でして、こういう報告がこれからももっと出てきてほしいと思うようなものです。

これは、北海道の理科センターの先生がお作りになった理科ソフトを使っているのですが、物の物理的な運動を、例えば物を転がしたり、水の中にビー玉とゴルフボールを落として沈めたり、いろんな運動をビデオに撮って、そのビデオをコンピュータに入れると、軌跡がプロットされていく、それがベクトルで縦方向にも横方向にも分析されて、絵に見えるようになる。そういうたいへん便利なソフトですが、それを子どもたちが各自に自分の興味ある運動、いろいろな物理的な運動をいっぱいビデオに撮って集めてくる。これはグループごとに集めます。これをそれぞれ解析をして、その運動の特色を自分たちで発見していくのです。子どもたちは、情報収集人といって、他のグループでどんな運動をどういうふうに解析しているか、まわって見て、また自分のグループに戻って、あそこではこんなことをやっているよとか報告する。こうしてさまざまな運動の特色を自発的、主体的に学んでいく。そのようなソフトウェアの使い方を示されています。

ネットワークというものが、情報を収集したり、編集したり、発信したり、それを使って交流したりして、子どもたちが物事をわかる、と同時にネットワークの先に人が居る、人と人との間で交流をしながら理解を広げていく、そのことの認識が深まっていることがわかります。そして、新しいコミュニケーションによる新しいネットワーク上の学習コミュニティというものが形成され、それをとおして学習が進んでいるのだなということを感じた次第であります。

今回の論文では、実践をとおして子どもの変容していくようすが見えてくるような論文が増えてきたと思います。理論だけであった

り、実践の羅列であったりではなく、子どもがどう変わったのか、どんな学習効果があがったのかがよくわかる、そういう論文の増えたことはうれしく思います。この賞のB部門は「コンピュータ活用部門」となっていますが、すでに現在でも、ネットワークとかWeb教材とかが含まれてきていますので、もっと広くICT、情報通信手段を活用した部門という名がふさわしいという方向にあるのかなということも思っております。よい論文を多数お寄せいただきましてありがとうございます。

(坂元 昂)

#### 審査委員の所感の要約

(安齋省一)

ただ今、克明にまた審査の雰囲気も伝わるような講評がございましたので、感想だけを申し上げます。昨年度はどうも中学校が小学校に押され気味で、土俵がつまって厳しいなと思っておりましたが、今回は見事に押し返して、少し押しているかなと思っています。教育研究ということになりますと、どうしても小学校に比べ、中学校は少しどうかというふうに思っていました。東書教育賞に限っては中学校がたいへん健闘していると言えまして、たいへん頼もしく、また嬉しく思っております。

また、今回は校長先生の立場から研究、実践されたレポートが数編ございました。入賞には至らなかったものもありますが、おそらく他の校長先生がご覧になれば、大いに共感するところがあるであろう優れた内容の論文です。今後も校長先生のお立場からのご応募がいただければ嬉しいことでございます。

(杉山吉茂)

小学校の部門で最優秀賞を受賞された石川先生は、とてもお若いのですが、アイディアに富む点ですばらしい実践でした。といいま

すのも、どうも最近の学生は頭がかたいように思われます。若いんだからもっと年寄りよりいいアイデアが出ないのかというのですが。今日受賞された先生方の論文を拝見しますと、若い先生方のアイデアに富んだとてもいい実践が沢山あり、ああ、これなら日本は安心だなと感じました。特別賞の菊池校長先生の実践は、特別な環境下であったにしろ、校長先生が日ごろもっている姿勢が現れていてたいへん良かったと思いました。全体に総合学習というのでもいいところがあることが分かりましたし、こういう良い実践が行われていることは頼もしいかぎりであります。

その一方で、数学教育に携わる者としては、数学や理科で良いものが出てこないことを残念に思います。数学や理科の学力の国際調査で、8年ほど前の調査では、シンガポール、韓国に次いで日本が3位でした。このとき4年生だった生徒が中学生になったときに、もう一度調査をしました。すると相変わらずシンガポールが1位、韓国が2位でしたが、そのあとホンコンと台湾が入って、日本は5位でした。シンガポールは20年ほど前には、人件費がとても安くて、日本から工場がどんどん進出していきました。その国が理科教育や数学教育を改革して、工業化も進めて、高賃金になって、今ではトップレベルの工業国です。もう工賃が安いからシンガポールに進出するなどということは考えられなくなっていて、日本の工場も撤退しています。ところが最近、日本から最先端の工場はシンガポールにもっていくという。それは日本よりシンガポールの人材のほうがすぐれているからだということです。

日本の教育のために、もっと科学教育のほうも振興してほしいと願っています。先生方のような実践が、理科や数学にも行われていくことを心から望みます。

(高桑康雄)

審査にたずさわって日は浅いのですが、今回はたいへん優れた実践が多く、レベルが高かったと感じております。とくに感心したのは、じつにいろいろなものが教材、教具として生かされていることです。最優秀賞の石川先生の場合も、黒板とチョークという、基本的なところから始まって、子どもたちの身の回りの物が教材として生かされていくということが分かりました。また、優秀賞の馬場先生の場合も、やはり身の回りの川の風景が教材になっています。一方ではITがどんどん使われている。今の学校では、昔ながらのメディア教材から最先端のメディアまでが同時に使われる可能性がある。考えられるいろいろなメディアをどう生かすか、それは先生方の創意工夫と意欲にかかっていると思います。そういう面での努力がよく分かりました。

もう一つ、実践性そして子どもたちにどのような成果が見られたのかという点が審査の基本ですが、だれかの、なにかの理論をひいてきて、それを枕にして、その枕が高すぎて、実際にやっていることはそれほどではないというようなものでなく、本当に日ごろのなかから力を生み出していらっやるといこともよく分かりました。

(三上裕三)

小学校の部の最優秀賞の石川先生は、お若くて、教職につかれてまだ数年というところでしょうか、これまでの受賞者のなかでも最年少のほうではないかと思います。今子どもたちに接していて、さまざまな生活上の問題があります。それらを簡単にいうと、食べる、寝る、遊ぶことにかかわっています。これが今日乱れていて、そこからいろいろな問題が発生してきていると思います。石川先生もそこに着目して、4年生を対象に実に分かりや

すく、さまざまな実験とか、工夫をこらして授業をされている。これは全国の養護の先生方にたいへん参考になるレポートだと思えますし、積極的に挑戦されたことに心から敬意を表します。

優秀賞の馬場先生の図工の指導ですが、先生自身がたいそう柔らかで豊かな発想の持ち主であることが、論文のなかに表れています。さらに他教科との関連もよく踏まえた実践であり、これからも発展性のあるところみであります。

仙田先生の社会科の研究ですが、日韓の歴史といいますと、敏感に反応する部分があるだけに、敬遠しがちな教材ですが、積極的に、客観的な資料をもとに、子どもたちに分かりやすく展開されていてすばらしいものです。とくに先生の熱意がたいへんなもので、韓国に何回も行かれて、韓国の先生とも交流を重ねるという、そうしたことが全て生徒のほうにも反映されているのではないかと思います。

それから今回は、校長先生の論文が2編残りましたが、学校経営の立場からの校長先生の論文があがってくるというのは本当に良いことです。北海道豊浦小学校の菊池先生の場合は、とくに校長先生の経営方針である「人間遊合楽習構想」の下で、これは子どもたちが中心にならなければ生かされない。そういう思いで実践されている。本当に心あたたまる実践報告でありました。

(赤堀侃司)

小学校では総合的学習というテーマが多くなったのですが、この総合的学習も昨今はいろいろ議論されています。これでいいのかという声もきかれます。私も総合的学習で身につけるべきものをぜひ明確にする必要があるのだらうと考えております。論文のなかの一つに、小学校での卒業研究であると生徒にきちんと位置づけて研究させていくというものがありました。これなどは感心いたしました。

た。大学でいえば卒業研究にあたるものは、生半可なことではだめです。何日も一生懸命にやるその積み上げがたいせつです。こういう位置づけをしないと本物の力にはならないのではないかという気がします。そういうことを小学生がやっている。いろんなデータをまとめてCD-ROMにしている。これはまったく大学生とおなじことで、感心したわけです。たんに論文だけでなく、電子メディアの媒体にしなければ、他の人に活用できないだろうと、するとそれが生かされてくる。次年度の生徒たちがさらに充実させていく、ということが可能となるというメディアの使い方がすぐれていると思いました。

中学校は教科中心ですが、情報活用では問題があります。ここでもそうしたことをあげられています。たとえば、検索でも実際にインターネットでやりますと、いろいろな問題が出ます。まあ時間がかかる。どういうキーワードを入れればよいのか分からない。さらに得られたデータの信憑性はどこにあるのか分からない。この先生の場合、そういうことをきちんと抑えている。そのために、いろいろなリンク集やら、先生が推奨したサイトからまず入らせるとかの指導方法をとられている。このことは検索にともなう問題を解決されたことです。この知見を皆が共有できるという、たいへん重要なことであると思います。どうか今回の論文に示された知見を、ひろく全国の先生方にも知っていただいて、参考にしていただきたいと願っております。

(堀口秀嗣)

昨今ICTという耳慣れないことばが出てまいりますが、4年ほど前からユネスコとかOECDとかの国際機関では、ITではなくてICTということばを使うようになっております。Information and Communication Technologyというのですが、情報はやりとりされて初めて価値を生み出すのだという、

そういうところに次第に視点が移ってきているように思います。わが国でも、2005年にはすべての教室にインターネットが接続された状態で、情報伝達手段が配置されることになっています。こうした状況の下では、おそらくコンピュータやインターネットを使った活動は進んでいくと思われますが、論文を拝見していても、足りない方向性としては、情報通信手段によって子どもたちの能力がアップ、パワーアップになっているかということを、実証的にというか具体的に明らかにしていく論文が出てきたら、これは本物でしょうと、

そのような感じがします。それを明らかにするためには、学習に取り組む前に、どういう力であったのかを調べておかなければなりません。そして、活動の結果として、例えばホームページを作るにしても表現の仕方がこんな風になってきているというようなところを具体的に示していただけると、他の学校でもそれを参考として、子どもたちの力をつけていくことができるのではないかと考えます。コンピュータの活用だけでなく、どんな力がついたのか、パワーアップを伝えていくことが大事であると思います。

